

# TRYセミナーとは？

新潟大学産科婦人科学 磯部真倫

「TRYセミナー」が私の人生を変えたといっても過言ではないということは「この本の内容」で述べた。TRYセミナーがなかったら、この教科書を書くこともなかったであろう。私自身が、腹腔鏡技術を習得するきっかけになったのも、医師として心構えを学んだのも、教育者としての目覚めがあったのも、TRYセミナーであった。

TRYセミナーとは、2011年から3年にわたって開催された若手医師のための腹腔鏡特訓セミナーである。エチコンがスポンサーとなり、当時倉敷成人病センターに所属していた金尾祐之先生が中心となって企画された。TRYセミナーは世に多くの技術認定医を輩出しただけでなく、各地で指導者となり後進を育て、学会での発信など多くの活動を行っている。またセミナー卒業生は、卒業生の枠を飛び越え、全国各地で同様の意思を持つ医師とコミュニティを形成しお互いを高め合っている。

この教科書の執筆者の多くがTRYセミナーの卒業生である。このTRYセミナーとは何が一般のセミナーと違うのか？何が人生を変えるのであろうか？TRYセミナーの特徴を挙げると枚挙にいとまがないが、その大きな特徴をいくつか挙げてみよう。

## ①ラパロ界のカリスマが主催するセミナーである

学会でランチョンセミナーや講演をすると立ち見まで出るラパロ界のカリスマが主催するセミナーである。これだけでもかなり希少である。

## ②参加者が全国からの募集であり、小論文で選抜されること

このような私的なセミナーで、参加者を全国から募集し、小論文にて選抜するというのは珍しい。第1回の募集人員は6名で、倍率は5倍であった。このセミナーに選抜され、乗り切るために必要な能力というものが存在し、それを小論文という形で自己開示する必要がある。

## ③STEPごとに課題が課され、その課題を評価するテストに合格しなければ卒業生と認定されない

決して何かの資格を得るわけでない。資格を得ることができないセミナーでテストが課され、そして落第となることは珍しい。それだけの魅力と動機づけと強制力が働くセミナーである。

## ④セミナーが全3回であり、その間の期間を含めると半年という期間セミナーに参加することとなる

現在開催されるセミナーのほとんどが単発ものである。セミナーが全3回であり、その間の課題を解決する時間を含めると約半年もの間、セミナーが継続する。

ほかにも様々な特徴があるが、TRYセミナーとはどのようなセミナーだったのか？私が参加した第1回TRYセミナーを、当時配布されたパンフレットを用いて説明する。

## はじめに

図1を見てほしい。これだけでも十分インパクトがあるだろう。ラパロ界のカリスマが「理想と思う最高のセミナー」と銘打っている。ワクワクしないわけがないだろう。

ただし、参加するための心構えも記載されている(図2)。合宿形式であること。まさしく半年続く長い道のりを示している。そして、厳しく指導されること、そのために若手医師に限定される。つまりカリスマが本気で教育してくれることがわかる。そして、テストが課される。資格を得るわけでもないセミナーで合否判定がなされることはほとんどない。

これだけでも十分厳しいセミナーが予想されるがさらに追い打ちをかけるようにさらに厳しい言葉が示されている(図3)。「本気の方のみの参加をお願いします」。どのようなセミナーが待ち受けているのであろうか？ 当時は非常に緊張したとともにワクワクしたものである。

**TRYセミナー** The Training seminar to Reinforce laparoscopic surgeries of Young generations  
若手医師のための腹腔鏡セミナー

**僕が理想と思うセミナー**  
**僕が今できる最高のセミナー**  
**それがトライセミナーです。**

Course Coordinator 金尾祐之先生

図1 | TRYセミナーのパフレット (その1)

**TRYセミナー** The Training seminar to Reinforce laparoscopic surgeries of Young generations  
若手医師のための腹腔鏡セミナー

**講習会に参加する前に了承してほしいこと**

- 講習会は合宿形式で、“腹腔鏡づけ”になっていただきます。
- 基本スタイルは、“部活の合宿”です。厳しく指導させていただきます。そのため若手先生に限定させていただきます。
- 各セッションごとに宿題を課します。また毎回テストを行い、合否判定を行います。

Course Coordinator 金尾祐之先生

図2 | TRYセミナーのパフレット (その2)

**TRYセミナー** The Training seminar to Reinforce laparoscopic surgeries of Young generations  
若手医師のための腹腔鏡セミナー

**本気で指導します。**  
**ですから本気の方のみの参加をお願いします。**

Course Coordinator 金尾祐之先生

図3 | TRYセミナーのパフレット (その3)

## コンセプト

実際のセミナーのコンセプトは何なのであろうか？ セミナーのほとんどは、ドライボックストレーニングや講演などある能力に特化したものが多い。しかし、どんなに手が動いていても、講演で知識を得ても、腹腔鏡手術はできない。このセミナーは「手」「目」「頭」を鍛えるセミナーであることに大きな特徴がある。

### ■手のトレーニング (hand)

まずは手のトレーニングである。ドライボックスによるトレーニングである。最もオーソドックスなトレーニングであり、世のセミナーは最もここに集約されているといっても過言ではない。しかしこのセミナーが普通のセミナーと違うのは、毎回課題を課され、それに対して結果を求められることである (図4)。一般のセミナーは概して「やりっぱなし」である。しかし、このセミナーは練習の結果が評価され、合否判定があるのである。カリスマの合否判定が日々のトレーニングと強制性を生まないはずがなからう。



図4 | TRYセミナーのパンフレット：手のトレーニングの説明

カリスマの合否判定が日々のトレーニングと強制性を生まないはずがなからう。

### ■目のトレーニング (eye)

次に目のトレーニングである。金尾先生執刀の音声入りの未編集のTLH (腹腔鏡下子宮全摘術)の動画を何回も見ることとなる。腹腔鏡手術が教育的である理由は、手術を動画で何度も見ることができるからである。また、音声付きの動画は今となってはよく見かけるが当時は斬新であった。無音の動画は術者が何を考えているかわからない。音声を入れること



図5 | TRYセミナーのパンフレット：目のトレーニングの説明

で、わかりやすく教育的になる。どれだけ見ればよいのか？ 感じるように手術を見ることは特に初心者では重要である。「don't think! Feeeel!」とは言いすぎではない。また実際の自分の手術を行った後に見ることで、これまで何度も見た手術が違った手術に見えてくる。エキスパートの動画というのは、同じ手術動画を見ても我々の成長によってその姿かたちを変えて我々に教えてくれるのである (図5)。



図6 | TRYセミナーのパンフレット：  
頭のトレーニングの説明



図7 | TRYセミナーのパンフレット：  
3つの能力の習得

## □ 頭のトレーニング (knowledge)

手術動画を何度も見ても、ボックストレーニングをいくら行っても解剖を知らなくては、手術はできない。今となっては多くの医師が述べる「膜解剖、層、腔」の考え方については、当時は斬新であった。腹腔鏡という拡大視野がもたらすこれらの考え方、立体構造の考え方をエキスパートからその理論を叩き込まれる。実際の手術の即した解剖の考え方である (図6)。

この3つが融合してTLHを習得するというのがTRYセミナーである (図7)。

## 募集要項, 選抜方法

募集要項は以下の通りであった。

- ①専門医取得後13年目までの医師であること
- ②腹腔鏡の術者として30例以上を経験していること
- ③STEP1から3すべてのセミナーに参加できること
- ④毎回出される課題に対して真摯に取り組み継続的な努力ができること

また、選抜方法は小論文であり、「腹腔鏡手術にかける情熱」を言語化し自己開示することが求められた。全国から30名程度の医師が応募し、結果として6名の医師が選ばれた。

## 実際のセミナー (図8)

### □ STEP1 大阪

STEP1は、全国から6名の医師が選抜され、2011年11月に大阪に集い行われた。参加者は皆、初めて顔を合わせる面々である。

まずは、金尾先生の「僕の歩んできた道のり」という題の講演を聞く。まさしくラパ

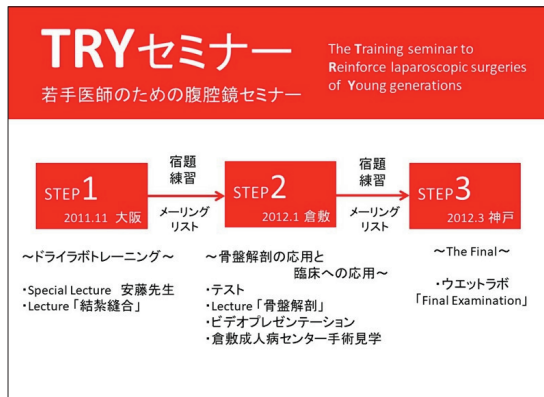


図8 | TRYセミナーのパンフレット：実際の日程

口のエキスパートとして全国を駆け回るカリスマがどのようにしてここまで到達したのか、当然初めからうまくいったわけではなく、山あり谷あり、キャリアチェンジ、環境を変える、そして目標を変えながらここまで進んできたこと、家族の支えなど、ありのままの「自分史」を語った。この講演は非常に斬新で衝撃的であり、その後の私に大きな影響を与えた。講演といえば自分の手術の技術や論文などの知識を披露するものという概念しかなかったが、エキスパートの「自分史」を共有することで、エキスパートといえども様々な困難を乗り越えてきたことを知り、エキスパートへのロードというものがあるか遠い先ではあるがぼんやりと見えることが動機づけとなると理解した。現在私が主催するセミナーでは必ず、参加者の誰かが自分史を語るセッションを設けている。

そしていよいよ実技指導が始まる。各々が現在地の能力評価を行うために皆の前で、「逆針で置いてある20 cmの0のバイクリルの針糸を順針に持ち替え、3回結んで糸を切る」というタスクを行った。この作業は、やりっぱなしがほとんどであるセミナーの中でプレテストという評価を行うことが注目に値する。しかしもう一つの注目点がある。皆の前で行うという点である。これから6カ月間、共に頑張る仲間の前で縫合結紮を行うという「自己開示」を行うことには、次のような意味がある。①自分の実力のなさを痛感する、②自分のありのままをさらけ出すことでやるしかないという覚悟ができる、③仲間でありライバルである他の参加者とともに自己開示し仲間意識を強める。当時、緊張しながら結紮を行ったことが今でも思い出される。

その後、縫合結紮の講義を聞き、一日中トレーニングに明け暮れた。そして、夜は懇親会である。はじめはぎこちない仲であったがアルコールが入る中で徐々に打ち解け、夢や悩みを語り合った。このセミナーの中で懇親会というのは非常に重要な位置づけにある。知識や技術を身に付けるのみでなく、懇親会の中でコミュニティが形成されていくことがよくわかる。

そして翌日、課題が言い渡される。プレテストで行った「逆針で置いてある20 cmの0のバイクリルの針糸を順針に持ち替え、3回結んで糸を切る」を45秒以内で行えるようにする」というもので、2カ月後のセミナーでその課題に対する評価を行うというものである。その際に何度も口にされたのが「結果がすべて」ということであった。いかなる過程も言い訳に過ぎない。手術と同様に一発で練習の結果を出すことを求められる。新たな決意を胸に秘め、各々は地元へ帰りトレーニングを積むこととなった。